

第十三部会

「梅小路」を通じて「宗教」を伝えるには

——現場からの考察——

太田 俊明

一

梅小路は御所の南西、京都駅からは西約二・三キロの所に位置する下京区西部の地域である。現在は住宅地や大規模な公園・水族館で知られる地域であるが、かつては葛野郡梅小路村で、古くは西市・西寺に隣接し、平清盛が屋敷を構えた地でもある。また戦国時代は梅小路城が存在したとされる。江戸時代になり、徳川幕府の庇護により、旧梅小路城の跡の一部に（安倍晴明の子孫である）土御門家が屋敷と天文台を構え、暦学・天文の一拠点として学習・調査・研究が行われるようになって。と同時に土御門家の菩提寺も中興され、そこには識見ある僧が止住した。なお、土御門家と梅小路の天文台の遺構は今日でも一部現存しており、「陰陽道・陰陽師ブーム」等を通じて様々なメディアで大きく取り上げられている。

しかし、土御門家の屋敷群以外はセリを中心にした近郊型の農村集落であり、近年まで付近でセリが栽培されていた。それゆえ、農耕の行事である「じじばい講」も行われていた。また、明治以降梅小路機関区や工場の設置が見られ、さらに近年では集合住宅が増大しつつある。

このように当時の最先端であった科学・技術と陰陽道と郊外

型の農村地帯とが混ざり合い、かつメディアで取り上げられている地で宗教（知識）教育を行うこと。「陰陽師・陰陽道ブーム」「オコナイ」「平清盛」この三点を通じて特定の宗教知識だけではない相互理解に繋がる宗教知識教育が可能ではないかと考えた次第である。

二

地域の現状から以下の長所が挙げられる。

1 他の信仰の存在と近隣の視野により、愛宗護法の精神から発される（個々の寺社に立脚する所属教団の教学に基づく）、解釈が弱まること出来るのではないかと同時に、教育（学問）と布教活動（信仰）の混同が避けられること。

2 地域を通じて宗教知識を伝えることにより、神仏と科学技術・他の学問分野に関して重層的な理解が可能になるのではないかと。この背景には科学と宗教を同一次元で話すことに対するカテゴリーエラーがある。宗教性と宗教知識は「可能な限り」分けて考察するべきであり、それらを混同しているように考えざるを得ない。

また短所として以下のものが挙げられる。

1 宗教知識と宗教性が混同しかねないため、現行法上公立の小・中学校における教育として適切な題材となりうるのか。また高校生・大学生・社会人に対してはどうだろうか。

2 地域の協力体制が充分に出来るのか。現実として地域的な関心は十分とはいえない。

3 複数の宗教が重なるため、受け手に宗教知識の理解がかえって困難になるのではないかと。

4 宗教の本質について特定の教義を重ね合わせた上で伝えるべきか、それとも教義の特徴を可能な限り差し引き、客観的に伝えるべきか。あるいは融合して伝えるべきか。

これらを、図として資料展開した(図に関しては省略)。また、現在も行われているので、結論の代わりにメディア・他の教育(研究)機関との連携についても若干触れた次第である。

宗教的問い「何」・「何事」考

——宗教教育方法のデザイン——

小山 一乗

一 疑問詞「何」は研究の母という。本稿の目的は、(一)拙前稿「何・不可思議・何事・畏敬の念——宗教教育批判論議の思考方法批判」(日本仏教教育学研究、七、平成二十一年)で取り扱った「宗教的問い「何事」考」での疑問詞「何」の姿態を再考し、(二)数の単位の、一・億・兆・恒河沙・不可思議、無量大数(吉田光由『塵劫記』)に人知の限界的表現を看取し、(三)小学校の道徳の「内容」中の用語「不思議」(中学年)、「人間の力を超えた」(高学年)等の教育方法のデザイン(走路)構想の「原、みなもと」を得るにある。不思議認識へ連関する疑問詞「何」の「personal」な発達・地域分布研究には、堀七蔵『児童生徒の疑問の調査研究』(福村書店、一九六三年)が詳しい。

二 疑問詞「何」は、文字学的には、「字訓」になう・なに・いづく。「甲骨文」、「説文」、「金文」。「金文」に金文に類する形があり、顧みて誰何(すいか)する形。「白川静「字通」とみえる。「誰何」とは「誰か」と声をかけて名を

問いただすこと。呼びとがめること。】(『広辞苑』)とみえる。「字」の命名を受けた人の子が、ある時空で、とにかく「何ものかがそこにいる(something there)」といえるような何らかの知覚を生起し、いかなる得體であるかを問う姿態が「何」であり、定義不能事態は適応機制にも波及する。

三 「何の木の花とはしらず匂いかな」(芭蕉)を引く。この「何」の生起文脈は複雑で根深い。半僧半俗姿の過客の芭蕉の「何」は西行の「何事」と共感し、神仏の習合を奇しくも問う「何」である。西行没後五百年目の『笈の小文』の旅の芭蕉は、西行への追慕の念篤く、「西上人のなみだのあとをしたひ」、かつ、「世人が伝えるその和歌にこもる衆生の切ない心根を汲んで、みごとに句作を示した」(岡野弘彦『日本の古杜 伊勢神宮』平成一五年、淡交社)。朝熊岳・金剛證寺を想起する。

四 世人が伝える西行の作とされる歌を引く。「道中伊勢音頭(敬神の歌)」(畑嘉聞作)に西行の歌が編み込まれていることには一顧しておきたい。

何事のおはしますかは(をば)しらねども

かたじけなさに(の)なみだこぼるる

西行研究者(坂口博規、元駒澤大学教授)によれば、作者論議の余地なしとしない。今は、世人が伝えるこの歌の宗教的疑問態「何事」指定に至る脳の生理過程・軌跡を仮説的に素描してみたい。思考実験による「course・走路」の架設である。

素朴で純粹で個人的な問いの「何(what)」が生起する。得體を定義することが不可能という事態に直面する。それでもとにかく「或る何だか」の存在を感じるのには禁じ得ない。「注意